

然らば此勤め人といふ言葉に包括せらるゝ階級は、我等今日の社會に如何なる地位を占めて居るかと見ると、其生活の程度また限りなく多種多様ではあるが、農民が田畑を耕す代りに、商人が物品の賣買をなす代りに、相當の教育より得たる一藝一能を以て、直接鋤犁を手にせず、又間口何間の店を張ることなくして、生活の資を得るものである。

而して此階級の必須條件とする處は、極内端に見ても、文字を讀み書きして算盤が弾けるといふことである。即其需要に應ずる丈の相應の教育がなくてはならぬのである。俗にいふ讀み書き算盤は、辨慶の七つ道具同様に缺くことの出来ぬものである。讀み書きの出来ぬ資本家は、よし前代の遺物であつても、

猶存在することが出来るが、讀み書きの出来ぬ勤め人は、よし現代の產物であつても無意味である。受付けから長官まで、門衛から支配人まで頭の程度に差別はあるが、何を措いても此點だけは忽にする譯には行かない。故に勤め人といへば、土方、人足、車夫、馬丁の讀み書きを主とせざる労働者と區別して、大まかに之を呼べば教育ある階級と見ることが出来るのである。

次に之を生活の程度から見るとすると、之には數へ立てやうも無い程の懸隔と差別とがある。某會社の支配人が均しく勤め人であり乍ら、年額四萬圓の俸給を得て界限の最高給者となり、又某富豪の某番頭が、年額二十幾萬圓を與へられて居るのから、日給六十錢、月收十五圓に至るまで皆是れ勤め人である。自家

の資本に働くのではなく、他人の爲めに頭を働かして飯を食ふのである。其最下級を見れば、教育をあまり必要としない階級、即土工人足等の収入より遙かに劣るものもあるかも知れぬ。又其最上級を見れば、好加減な自己經營者、資本家を遙かに凌ぐものがあるかも知れぬ。けれども我等勤め人は、住ふ處はよしや棟割長屋であつても、そこに一戸を構へて定住する。土工人足等のどこやらに不定、動搖の態あるに反して、嚴として國家社會の一素成分を形くつて居るのである。押しも押されぬ、獨立自存の民である。ボンヤリした言葉ではあるが、暫く世間の慣習に倣つて、生活の程度を上中下の三流に分つとするならば、我等の或者は大手を振つて上流に屬し、或者は遺憾乍ら下

流に屬するかも知れぬ。而して他の大多數は中流に屬するものである。と實はきつぱりと言ひたいのではあるが、有體にいへば中の下、下の上が大部分を占めて居るかも知れぬ。

之を社會の健康——もしさういふことが許されるならば——からいへば、多數であり、且つ教育がある丈けに、最も重要な階級である。農民元より大切である。商工業者又決してひけを取るものではない。けれども如何なる階級が社會全般の整調の任に當るかといふと、これはどうあつても教育ある階級といはなくてはならぬ。故に我等の健不健はやがて社會全般の健不健に影響するのである。これが洋服を着て靴を穿いて、所謂「お勤め」に出る爲めに、旦那様と呼ばれ、奥様と稱せらるゝ科料

である。大に自重して宜いところである。

更に之を大工が木を削り、左官が壁を塗るやうに、勤め人の執る事務といふ側から見ると、こゝにも亦幾多の區別があつて、元より一様に纏めることは難いが、我等の多數は一體如何なる方面に勤務して居るかと見ると、官公私の省廳と、商工界の會社、銀行、工場、商店等が重なるものである。故に我等日々の勤勞は、輕重緩急の差はあつても、社會といふ一大機關の運轉する樞要の部に當るものと見るべきである。塀を造るならば大工に頼むべく、石垣を積むならば土工を雇入ると均しく、公私の事務を處理し、商工業上の營業を始めやうといふのには、何をおいても我等の階級に待たなくてはならぬ。大に強いところ

である。

職業に貴賤なし。全く其通りである。各自の根本の精神から論ずるならば斯くあるべきは勿論である。併し乍ら其職業の社會に及ぼす用の方面から見ると、おのづから區別が起つて來る。即ち我國今日の現状並に周圍の狀勢から推して行つて、如何なる點に力瘤を入るべきであるかと考へて見ると、重荷はどうしても我等の負擔であるらしい。否我等の援助なくしては、今日の處一切の活動が中止せられ、又事業らしい事業の企劃が望まれないのである。故に此意味からいへば見かけは腰辨であつても、事實上の運轉は我等の掌中に握られて居るのである。國家平常の進行も、異常時の活動も、又金が喰る資本家の

企業も悉く我等に待たなくてはならぬのである。

さうなると此に新しい、但しハイカラな問題が起つて来る。

即ち疊屋は疊屋、植木屋は植木屋といふやうに、代々家職を継いで行くもの、又さうする方が最も有効であるとする——是はもとより假定であつて、豆腐屋の子が建築技師となり、魚屋の子が天下を料理する政治家となるのは一向差支へない——勤め人の子は勤め人といふ問題が起つて来る。否現に之を實行しつゝあるものが澤山にある。而して油を賣らぬ勤勉優良なる勤め人の執務振りが、事務の進捗と有効とに重大なる關係があるものとする以上、第二の勤め人の優良を謀ることは何の不思議もないことである。人種優良學が許されるならば、優良なる勤

め人の養成も亦許されなくてはならぬ。且つ個人の努力は決して無効に終ることなく、肉體的に又精神的に相傳ふことを得るものならば、理想的の勤め人の爲めに、社會國家が其制度機關を設備する以外に、現代の勤め人其人が之を心掛くべきである。我等は優良なる軍人か否か、一國の興亡を決するものであることを聞きもし、且其實物教授にも接しつゝある。果して然らば優良なる勤め人か否か、一國の盛衰を左右するものであることも承認しなくてはならぬ。此意味よりしても現代の勤め人は、其充實生活によつて次代の勤め人の優秀を期待すべきである。別して海外發展の聲の盛んなる今日、世界の勤め人と伍して遜色なきを期する爲めには、我等は如何に之を力説する

も決して過ぐることはないと思ふ。

又更に資本家に對する、廣い意味の労働者といふ點から觀察したならばどうであらう。

資本と労働！近代の社會問題は殆んど之に盡きて居るかの感があつた。大戰亂以前の世界は只此問題以外に何物も無しといふやうに、種々な形に於て賑つて居つたのである。又今日と雖も言論上には餘儀なく下火となつて居るもの、事實上には依然として對立する問題である。

今暫く資本家即會社其他の幹部の側に立つて見るならば、昔日の如く、労働者の頭の未開なるを奇貨として、彼等の労働を極度に吸ひ取り、只管自家の財力の増加を計るといふ方針は最

早時代後れである。殊に勤め人の如き教育あるもの、又とりわけ現代の最も自由なる思潮に養はれたるもの、言ひ換へれば何も彼も呑も込んで居ると同時に、容易に意氣に感じない階級を相手にするのには、主従若しくは僱主被僱者の關係のみを以て臨んではいかぬ。多少にても無理があれば直ちに壓迫と誤解される危険がある。飽くまでも合理的に行くべきである。

之と同時に資本は資本のみにては何等の價值を有するものでなく、所謂寶の持ち腐れであること、之を最も有効的に運用して、始めて生きて來るものであることを篤と思案しなくてはならぬ。而してこの運用の實際の擔任者は即勤め人であるとするならば、一定の俸給賞與といふ以外に、自己の利益は是れ共勞

共働の結果たることを考へなくてはならぬ。而して只之の心掛けさへあるならば、實現の方法はいくらでもある。今日以後の資本家はどうしても此方針で行かなくてはならぬ。社員其他を酷使して只奉加帳にのみ氣前をよくし、以て虚名を博さうなどは沙汰の限りである。

然らば資本家の相手方たる労働者即勤め人の側から見たならばどうであらう。先づ第一考ふべきは、現代の勤め人が如何程最善の教育に浸つて居つても、畢竟するに空拳は是れ空拳であるといふことである。一文無しは繪にも書けないといふことである。資本家奴がと憤慨しても無一物では何の企業も覺束ないことである。此の無慈悲なる眞理をよく領解するならば、資本

家を以て労働者を虐使するもの、即勤め人の汗に於て贅澤するもの、彼等を除かざる可からずなど、いふ、威勢のよい通り文句を其儘に受容れてはいけない。單に表面の事實のみを以てしても、彼等の資本家であるといふことは或事業を豫想する。而して事業の直接の管掌者は勤め人である。無資本の勤め人は之に其労働を提供して共同の利益を謀るのである。同時に生活の保障が出来てくるのである。資本家が勤め人を缺くのは、水夫の無い荷船のやうなものであり、勤め人が資本家を缺くのは發動機の無い飛行機見たやうなものである。いくらちたばたしても無効である。

而してこの兼合が解つて來れば、勤め人としての我等の覺悟

が自ら變つて來なくてはならない。只資本家の爲めに使役せらるゝ器械的存在ではなくて、敵の武器を奪つて自家の用に供すと同様に、資本の遺憾なき運用を謀る有意義な活動を試みる事ができ、又充實せる自己の實現をそこにためすことが出来るのである。

序ながら我等は此機會に於て、資本家と勤め人と、狭い意味の労働者即職工、工夫等との關係を見て置きたいと思ふ。

由來資本家と労働者との戦ひは、通俗にいつて見れば足元の見くらべ戦である。給料を昇げろといふ。昇げなければ仕事をしないぞといふ叫びは、不止得窮状より起る哀音であつても、往々にして之を脅迫と解される。碌々働きもせず給料を取ら

うとする不心得の慣用手段であると見做される。又給料は昇げられない、時間も減されない、嫌なら勝手にするが好いといふ捨臺詞は、繰合せのつかぬ算盤から出た正直な告白であつても、往々にして之を威嚇と解される。儲けて居る癖くせに出し惜しみをする慾張り根性であると見做される。誠にどちらもどちらといふえがみ合ひであつて、兩者の平和は最も珍らしいものゝ一つとせられるのである。

併し勤め人と資本家との關係が、これ程の杆格を來たした例は極めて罕である。事務の性質又は其數、或は生活、教育の程度等より起る相異であるが、我等勤め人は恰度兩者の中間に立つかの觀がある。これは資本家と労働者程の懸隔もなく、従つ

て相互の領解が容易に行はれる爲めであるとも解せられる。而して此二者の争闘といふことが、近き將來に於て、而かも根本的に解決せらるゝことが容易に望まれないとするならば、勤め人は其絶好の地位を利用して、兩者の緩和調節に當るのは頗る要を得たる事であると思ふ。只兩者の相争ふや勤め人はいつも資本家の味方と目せられる傾がある。これは特に注意を要すべきことである。

十二 住宅と服装

借家と勤め人——百年も永住の心——其場其時の樂み——

——ともかくも洋服——月賦制の廢止——生きんが爲めの

食事

こゝに住宅といふ問題を掲げても、我等は月收幾十圓の勤め人は何圓の家賃に住むべく、又は何千、何萬金を投じて住宅を建築し、以て充實生活に資すべしといふのではない。只我等が借家であつても自宅であつても、一個の家庭をそこに構へた以上、如何にして之を遺憾なく利用しやうかといふことである。又我等は住宅を問題とする際に、何を標準とするかといふと、

勤め人多数の現状といふことが眼目であることは言ふ迄もない。それ故堂々の邸宅を構へて婢僕の十數人も使ふといふのは、主人公は均しく勤め人であつても、あまり景氣が良過ぎて不尠勤め人級を超越の傾がある。そして我等の考へて見やうといふのは我等の多數である借家級の勤め人である。故に説くところ往々にして超借家級の勤め人に及んでも、それは元來の目的ではなくて、借家級の勤め人の住宅如何といふこと、共通の點であるからである。

さるにても借家と勤め人！電車と勤め人の夫の如く、是も亦逃れ難き運命である。勤め人である限り又自宅を持たぬ限り、日中の勤務時間八時間を除いた、残りの十六時間の大部分の消

費處として、どうしても無くてならぬ一構へである。しかし一旦之を借りたからは遠慮なく我物顔に振舞つてよいのである。家主と隣り合せであつても、來客あらば大に「あばら屋」を連發して苦しくないのである。又其日の風次第にて今日は芝、明日は四谷と轉々することの出来るのは、勤め先きと、例の月收生活案の都合もあるが、第一に住宅が我有わがものでないといふ心易さである。従つて時としては東京市内の老若男女が、電車賃をかけて押しかける上野公園を、朝夕に見物するお役人もあれば、遠方に旅行でもするやうにして、海を見やうと出かける人のある中に、座敷に居ながら眺め渡すといふ高輪臺の會社員もある。又其人の好みによつて、どんな門でも門がなくてはと、大に山の

手を探し廻る官吏があれば、そんな門には目もくれず、道幅半間にも足らぬ迷宮の如き路次を尋ね歩いて、格子戸に圓窓を粹で宜いねと珍重がる店員もある。

夫にしても楽しきは新婚後始めて持った家庭である。借家でこそあれ、若き男女の一對が世の荒波を乗り破る第一の碇泊所ふながかりである。大きい雛のまゝごとゝいふに詐りなく、少時は勤め人しばらく放れのした華想生活を樂しむのであるが、長男が京橋の彌左門町、次男が牛込の神樂坂、次の娘が四ツ谷笹筒町に生れたといふやうに五年十年二十年と年が経つと、武藏野が一面に貸家と化した今日、我等勤め人の子たるものが借家に生れ、借家に人と爲り、また借家に終るのも餘儀なき次第である。但し之を以

て借家生活を悲觀するものとしてはいけない。何となれば勤め人といふことが既に定住を難しとするものと、普通に解釋されて居るのである。即ち任地の時に變更すること、商店の如く顧客を呼ぶに定着の必要なきこと、貸家並としても自宅を建築するの容易ならざること、又之を容易なりとしても、現代勤め人の進んだる趣味に適する建築は一寸問題であるといふやうな幾多の原因が、我等をして益々借家黨たらしめるからである。のみならず我等は消極的に不止得借家人たるに甘んぜずして、積極的に進んで借家黨たらしめるものである。殊に我等の如き都會生活者にあつては是が何よりの良策である。

大體からいへば東京乃至大都會の貸家は趣味と實益との點に

於て年々に改良されて居る。之と同時に我等の趣味なり嗜好なりは又更に一步を進めて行く。夫故ひどい工面をして建てた自宅であつても、數年ならずして厭氣が起つて来る。況んや貸家に於てをやである。別して家賃目當の貸家となると、只家でさへあればよいのである。小體裁には出来て居るが五年六年と住ふと忽ちガタ／＼に緩んで来る、新宅を追ふて移り行くのは理の當然である。而して尋ね當てた貸家が、芝の地獄谷にあらうと、又は麴町の富士見町にあらうと夫は問ふところでない。たゞ要點は如何に之に住うべきかにある。充實生活の狙ふところは其處にあるのである。

「なアーに借家だもの。」

我等勤め人の多數は口にこそ出さずとも、包まずにいつて見るならば、始終しよつちうこんな氣で居るのではあるまいか？
 やがて自宅を持つといふ確しかとした當があるならば兎も角、又自宅を持つといふことは種々な理由から實行不可能として置き乍ら、移る家毎に「なアーに借家だもの」と渡り歩行く勤め人の生活は、果して健全なものであらうか。而して充實生活は之を等閑に附し去ることが出来るだらうか。出来ない。どうあつても出来ない。

我等は、時は現にある限りのものである。今日の分は今日に限られて居る。今日の分を明日といふ譯には行かないのであることを既に細述した。然るに一日の三分の二の十六時間の大部

分を家庭に送るものとして、来る日を、来る月を、「今は斯うでも何時かやる」とか、「もう五六年してから」とかいふやうに、「なーに借家だ」観を土臺にして、恰も旅館にでも泊つたものゝやうに、腰を据えることなくして来る歳々を送迎するといふのは、あまりに^{あはた}遠しい生活ではあるまいか。且つ此根本の謬想を頭に置けば、障子は子供の罪に塗り附けて穴だらけにする。戸や襖の開閉が^{ぞんざい}粗雑になる。床の間は床の間として軸物をかけ花瓶にても置かるべきであるのに、行李の口の開いた儘のを置いたりする。裏木戸はカンの外れ通し、庭には鉢の一つも無いなどといふ、随分だらしの無い貧弱な借家振りが起つて来る。或は

「こんな家ぢや仕様がなない。」

といふかも知れない。けれども夫は家の罪ではない。「こんな家」を借りた「こんな人」の責任である。苟も自己の生活を営むべき根據と定めたからは、出来得る限り之れを利用し之を善用しなくては損である。非常に愉快とならずとも少くとも不快でなく住はなくてはならぬ。借家に生れて借家に死ぬる我等勤め人が只「借家なもの」とのみ言ひ通すならば、何れの日か借家ならざる生活を営み得るであらうか？ 障子は破れたならば直に之を繕ふべく、床には四季折々の花卉を挿むべく、庭には縁日より植木草花を仕入るべく、家主の譽める譽めぬに頓着なく快適にして充實せる生活を本位とし、大に掃除を行ひ清潔を旨とすべきである。

之に就いて思ひ合はずのは、歐米人と我等日本人との相異である。彼等は家にあるときは勿論、旅館にあつても、汽車中にあつても、又船室キャビンにあつても、日本人ならば萬事は到着してからといふところを、恰もそこが百年の定住地でもあるかの如く、悠々と落着き拂ひ、飽くまで之エンジョイを樂むといふ美風がある。其時其場の時間を自己の趣味性向に相應させて、遺憾なく歡樂しやうといふ習慣は、いつも浮足ソハ〜の我等は大に學ぶべきである。即我等從來の態度は將來のある目的物の爲めに、あまりに現在を犠牲とするものであつて、未來時のある一頁の爲めに、現在時の一頁をあるかなきかに取扱ひ、何等の印象を残さず、無意義に經過し去るのは我が充實生活の敵といはなければならぬ。

服装も亦月給高に準じて、幾何圓のを着るべしといふのでは無い。只我等の主張と相關する點に於てのみ考へて見たいのである。

言ふまでもなく勤め人の多數が喜んで着用する洋服は、我國在來のものではなく、五十年來の借用物である。併し或る外國人のいつたやうに、

「歐米人の最も困難とする衣服住の變更をさへ平氣でする

日本人は、善いも悪いも見さかなくなり、打壞してしまふ。」

のであつて、勤め人さへあれば羽織袴の優美な風はあつても、襟カラーは月に三度の洗濯、洋袴は長刀なりの皺だらけ、靴は一週に

一度塗るや塗らずであつても、何でも彼でも洋服でなくてはならぬものと極めて居る。従つて今日の形勢は、勤め人には和装か洋装かの問題ではなくて、一般的には日本人たる我等に如何に洋装を適合せしむべきかである。寔に少壯勤め人等の人知れず苦心するところである。

我等の同僚の一人は斯ういふことを言ふ。

「ネクタイを結ぶのにどうしても十分はかゝる。それも氣に入つたやうに結ばれればであるが、さも無いと十五分も二十分もかゝる。一番厄介なのは是れだ。」

實際此同僚氏は、洋装の苦心を唯ネクタイのみに集めたかと思ふ程に、いつも手際よくすつきりと結び上げる體裁家であるが、

それにして十分、十五分、二十分と手間取るといふのは甚ひどい。若し此順で行くとすると下着からワイシャツ、洋袴、上着と夫々に装ひ終はるのには、三十分も、亦夫以上もかゝるかも知れぬ。お嫁さんではあるまいし、忙しい朝の出勤前をあまりといへば緩急至極である。しかし其根本をいつて見れば我等勤め人の多數は、本當に洋装の方法を知らないのである。恰度支那の留學生が日本服をだらしないく着用し、宛も日本服の専用者たる我國民を侮辱するが如きと同様であつて、歐米人から見たならば我等日本人の洋装は、體格からいつても其着こなしからいつても、頗る挺變なものであるに相異なる。其證據には電車内の觀察が一番よい。先づ同僚氏の結ぶネクタイの代りに造り附け

のがある。これは時間の經濟からすると非常なる長所はあるが、洋装としては殆んどお話にならない。又時としては折襟を天地して、折れた方を下にし、其上に造り附けのネクタイを戴つけたのなどもある。大正も五年の今日全く驚かされるではないか。殊に不思議なのは日本服とあれば折目正しきを尊ぶ癖に、洋服となると上着も洋袴も皺だらけであつて、一向に心に掛けないことである。暑い寒いの變り目に、行李から引ずり出した儘のを、火熨斗もかけずに洋装であるは、歐米人が見たならば必ずや歎息の聲を漏すであらう。

之に反して少壯勤め人となると、殆んど洋服の爲めに浮身を窶して居るかの觀がある。冬着、春着、夏着と季節毎に洋服屋

を控所へ呼び込んで、縞柄、地質、スタイルに非常なる苦心をする。そして毎朝の出勤は、さながら他所行式の服装であつて、職工が工場へ行くと同様に、働く爲めの事務所へ行くとは思はれぬ、第一公式の扮装いでたちである。月賦調製といふ便法の設けられたのはこの美装欲と月収額との情意投合である。其他帽子、時計、ステッキ、靴等の装身具を、前の洋服と釣合つたものとする、事務所通ひの労働者としては少し立派過ぎる勤め人が出來るのである。

外以て内を制す。今も昔も變りの無い眞理である。服装などは一見何でも無い様ではあるが、各自の精神に及ぼす影響は決して尠少ではない。制服制帽といふものゝ一面の効用は此に存

するのである。往時の武士が社袷に帶刀して威儀を正したといふのも亦之が爲めである。上根下根一様には行かず、何れ方便ではあるが、中身相應の服装であつて欲しいと思ふ。如何程アツプ・ツー・デートの洋装であつても、頭が貧弱にて、吹けば飛ぶやうにては勤め人としてのみではなく、唯の人間としても屑である。殊に洋服屋の利益のみを計るが如き月賦制は勤め人を奴隸にするものである。斷然廢止すべきである。

或る百貨店の主人は次のやうにいつて居る。

「店員の服装は、若い者には氣の毒ではあるが、色合は凡て紺色としてある。ネクタイは黒色、靴は黒色の編み上げ靴下も黒色と定めて置く。といふ理由は變つた縞柄や色合

を用ゐ出しては際限がない。短靴であればこそ靴下の好みも要るが、編み上げに隠れてしまへば、洒落るも洒落ないもない。商人は可成地味を心掛くべきである。」

又以て我等勤め人の鑑戒となすべきではあるまいか。さて以上に衣食住中の住衣を述べた我等は、食に就いても亦簡單ながら二三の要點を述べて見たいと思ふ。

是とても前と同様に何を食ふべきかと、兵營生活のやうにキッチンと割當てをするのではない。唯食事其物を如何に快適にしやうかといふことが第一である。出勤前は我等の實驗する如く何といつても心急はしく、又午餐は勤め先きに済ますを常とするかぎり、我等は勢ひ退出後の晚餐に充分の意味を持たせなく

てはならない。十分か二十分に片附ける我國在來の早飯主義はあまりに呆氣ないものである。一日の肉體的疲勞の恢復、且つは一家團樂の和樂といふ上から見て、從來のあはたしいきを止めて、ズツと落着いて食事をなす慣習を養ひたいと思ふ。我等の豫定せる時間割の、四時より七時迄の三時間はこの食事時間の繰合せには充分である。笑話もよく、世間話もよく、家庭に引込み勝ちの妻君に、外界の消息を傳ふるもよい。而していつとはなしに家庭としての健全に向ふべきである。眞に生きさんが爲めの食事たらしむべきである。

家族中の他の各員に關係のない自分が考へられないと同じく、自己の充實生活は又家庭の諸員の充實生活を考へて始めて

成立すべきである。

補録 實行上の要件

黙々たる實行——鼻にかける天狗病——豫定案の調節——

——主客轉倒——不屈不撓——趣味と性向

我等が以上章を重ねて説き來つた、日收時間の支出豫定、又は週間本位の時間割に従ふ生活を開始するとして、何事にも付き纏ふ人間の弱點は、折角の計畫をして有名無實否却つて有害に終はらしめないとも限らぬ。是れ我等が次に數項の警告を併せ述ぶる所以である。

第一 我等が「新生活の出立點」に於て注意要件を擧げた通り、其開始以前に在つては妻君にも語るなといつたのであるが、

茲には開始後に在つても、決して之を他に吹聴するに及ばぬことを附け加へなくてはならぬ。何となれば我等は日中にあれ夜分にあれ、一の豫定案によつて其時間の利用にとりかゝつたのは自己の時間であつて、決して他の時間ではないのである。従つて我等が其課程を追うて猶及ばざるを畏れて居るのに、世間の人は我等の着手前の如く空々寂々、之を無益に消費しつゝあるからといつて、情無い顔をするには當らないのである。我獨り醒めたりといふやうに悲觀するには及ばないのである。唯黙々として自己の時間割を守り行くべきである。

第二 音樂なり繪畫なり娛樂なり、又は一科の學問なりの研究にとりかゝると、我等は又譯もなく天狗病に罹つてしまふの

が常である。漸く手繕き位のところであり乍ら、直ちに一廉の通人を氣取り、悉く鼻にぶら下げるのである。殊に漢詩、和歌、俳句、謠曲等になると、どうしても黙つては居られないのである。機會さへあれば見せびらかす、其儀ならば拙者だといふやうな顔をする。誠に鼻持のならぬ次第ではあるが、殆んど百人が百人まで免れ難い弱味である。

是に就て思ひ起すのは係長をして居つたR氏である。彼は隣家に漢詩人のあるを幸ひに、作詩の稽古に志したのである。而して手始めに唐詩選をあてがはれ、常にポケットに忍ばせ、閑さへあれば事務室内でも披げたものである。ある時例によつて劉廷芝が「代_レ悲_レ白頭_二翁_一」の、

「年々歳々花相似、歳々年々人不_レ同」
の句を選び出して、

「どうも佳いね君、旨い事をいつて居るだらう。」

と五月蠅く同僚のB氏の承認を求めたものである。否實の處は「此詩の妙味が自分には領解が出来るが、お前さんにはどうだ」といふ意味なのである。そこで平生此態度に嫌_{あきら}らすとしたB氏は

「旨いか不_{まづ}味いか判らないが、我々は年々歳々月給同じです。」

と返答をしてしまった。其時のR氏のテ_レ加減は一通りならぬテ_レ加減であつて、傍の我々も頗る氣の毒に感じた程であつた

が、誰を恨むでもない先づ自己の鼻を眺むべきである。

第三 毎朝三十分から電車内の五十分、殊に夜分の二時間に充てる豫定案を、單に豫定案として取扱はずに、之を抜き挿しの出來ぬ規則と視て其實行にのみ汲々し、他人の迷惑も何も構はぬといふのは、是亦其弊に墮したものである。要するに豫定案は豫定案たるが故に、相當の餘裕を置くべきであつて、是は夜分の二時間を全部或る勉強に當てず、一時間半位に見積るべきであると言つたのと同じ理合である。而して其豫定案を實行するに或は嚴に過ぐることなく、又寛に過ぐることなくして、常に調節宜しきを得たる生活を營むことは、實に難事中の難事である。

第四 又其豫定案に囚はれて、此次ぎは何、彼次ぎは何といふやうに慕ひ行く慕進主義は以ての外である。何となれば常に次ぎの課程が頭を占領して、主人公たるべき筈の我等を驅使用するやうになり、主從全く地を替えて、自己の時間を支配するのでなく、却つて時間に支配せらるゝに至るからである。といつて時に豫定案の中止を企てるのは無益である。元來が豫定の課業過重の爲めであるから、之を矯正するのは豫定案の改正より外に道はないのである。

但し一の研究が我等に取つて甚だ興味あるものとする、我等の知識慾は些かの猶豫もなく、先きへくと走らせるものである。が是も亦好ましくない態度である。而して豫定案がどの

道荷厄介に感ぜらるゝときは、應急手段として多少の手加減を施すべきである。即最初の立案に際して、充分の熟慮を施すべしといつたのは是が爲めである。

第五 最初の失敗は細心の注意を以て避けなくてはならぬ。之は既に詳述した點ではあるが、若し此點に於て周密な考慮を用ゐないと、折角の向上心を中途に抑へることゝなるのである。其代り一旦是と決した以上は、其課程が苦痛であつても困難であつても、不屈不撓、一切を忍んで之を成就しなくてはいけない。而してこの成功の感より生ずる自信の念は、此上なく貴重なものである。

第六 最後にいふべきは研究、勉強の目的物を選択にするに

當つては、飽くまでも自己の趣味と先天の性向とに聞くことである。徒らに人真似するのではなく、根ざしの深い嗜好によるのが第一である。「好きこそ物の上手なれ」。是が第一の着眼である。

却説我等は茲に筆を擱くに當つて、便宜の爲め以上の提案を要約して見たいと思ふ。

我等は先づ最初に、我等勤め人の時間に關する觀念を新たにする爲めに、二十四時間の定収入(一)に於て其特質を明かにし、我等の生活と時間とが如何に密接なる關係に在るかを確めたのであつた。が此時間の遺憾なき利用は、我等根本の要求に基礎を置いて始めて有効であり且つ實行も可能であるが故に、現代

勤め人の心理解剖(二)を試み、以て新生活の出立(三)を如何にすべきかに進んだのであつた。而して我等の提案は最も合理的且實行可能たるべきを期する爲めに、出勤即ち家庭より事務所へ(四)、退出即事務所より家庭へ(五)の一日中に在つて、新提案による時間の按排が成立し得べきか否かを見んとして、我等勤め人の實際を参照し、心理的勞作としての効果を確めたのである。更に之を週間本位(六)としては、日收二十四時間に割當つる課程を如何に進行せしむべきかを豫定し、愈々實際問題に入り、往復の電車時間(七、八)に心力の集中と反省とを練り、且つ自己評價の内觀に及ぶべきを説いたのである。而して豫定案中の最初の二時間(九)を如何に費すべきかに關しては、科學

的知識の獲得の急なるを力説した。併し乍ら一科の學問をつぎつぎに研究修得したりとするも、是等科學界を支配する一大原則の流行を看取することなくしては、折角の學問も遂に個々の分立たるを免れない。これ事務室外の世界(十)を眺めて、自然界と人事界とに親接し、頭と心情との擴大を期すべしと爲したる所以である。別言すれば、此の如きは我等の主張する充實生活の極致であつて、敢て宗教道德を云ひ、又は文藝哲學を特説せずとも、自然と人生とに對して之を統一的、綜合的に觀るべき段階に進展すべきを語らんとしたものである。

けれども如上の所説は主として自己を中心としての觀察考案であつた。故に我等勤め人は之を社會といふ周圍から見て、如

何の地位(十一)にあるかを見るのは、亦不可缺觀察の一つであり、最後に我等の實際問題である衣食住(十二)は我等の提唱する充實生活の實現に如何に關係すべきかを見たのである。

其間説く所往々にして勸戒講説の調を帯んだとしても、夫は我等の素志ではなくて、我等は只勤め人の一人として、我等同僚の日常生活を如何に充實的に、又如何に快適に營むべきかの方法を、相共に講じやうとした迄である。豁眼達識の先覺者の響に倣ふのでもなく、又教壇に立つ説教者の如く宗教道徳を眞向に振り翳すのでは更にないのである。只何れの點より見ても樂でないこの世の中を、如何にして有意味に送るべきかの方法を考へた迄である。只夫丈けである。故に之を機會として、よ

り良好なる方法が案出せられ、我等勤め人の生活がより廣く、より有効に營まるゝに至るならば、我等にとつては洵に望外の賜と言はなければならぬ。

退 出 迄 の 充 實 生 活 終

大正五年六月二十日印刷
大正五年六月廿五日發行

定價金五拾錢



著者 丸野内人

發行者 板谷吉太郎

印刷者 牧口駒三郎

發行所

東京市本郷區
本郷一ノ人通

日東堂

電話下谷 四三六二
振替東京 二五五八

抄錄目錄書行發堂東日

文學博士
前田慧雲先生著 佛教思想講話

菊版四百五十頁
定價壹圓四拾錢
送料金十二錢

堀越善重郎先生著 怒濤一蹴

中版五百六十頁
定價壹圓四拾錢
送料金十二錢

滋野清武男爵述 飛行機の話

中版二百五十頁
定價金五拾錢
送料金六錢

平元兵吾氏著 八大學と秀才

中版二百五十頁
定價金六十錢
送料金六錢

佐藤仁之助先生著 女子書簡文講話

菊版四百頁
定價金壹圓廿錢
送料金八錢

抄錄目錄書行發堂東日

齋藤溪舟先生著 青山御所之陛下

中版三百六十頁
定價金壹圓廿錢
送料金八錢

齋藤溪舟先生著 女官物語

四六版頗美本
定價金七十錢
送料金八錢

徳菱女史著 迷宮記

中版二百五十頁
定價金八拾錢
送料金八錢

平野秋來先生著 長州の天下

菊判三百三十頁
定價金壹圓卅錢
送料金八錢

平野秋來先生著 兵兒の國

中版三百頁
定價金九拾五錢
送料金八錢

抄錄目錄書行發堂東日

堀内新泉先生著 百人百癖 中版四百七十頁 定價金壹圓拾錢 送料金八錢	堀内新泉先生著 細君百癖 中版四百余頁 定價金壹圓廿錢 送料金八錢	堀内新泉先生著 人間と運命 菊版二百八十頁 定價七拾錢 送料金八錢	堀内新泉先生著 愛郷記 菊版二百四十頁 定價金八拾錢 送料金八錢	榎本秋村譯 ソルツ 冥想錄 中版美本全一册 定價金壹圓廿錢 送料金八錢
---	--	--	---	---

抄錄目錄書行發堂東日

本間久先生著 少年 動物園 中版二百五十頁 寫真版三色版 數十枚挿入 定價金壹圓 送料金八錢	コナン・ドイル著 本間久先生譯 獨身華族 中版三百二十頁 定價金七拾錢 送料金八錢	邦枝完二氏作 毒婦曆 中版二百五十頁 定價金七十五錢 送料金八錢	長田秀雄氏作 飢渴 菊半裁百五十頁 定價金四拾錢 送料金六錢	小山内薫先生著 演劇論集 中版四百五十頁 定價金壹圓拾錢 送料金十二錢
--	---	---	---	--

■ 名家近作叢書 ■

編壹第

田山花袋著

小品集

泉

〔新刊〕

編貳第

谷崎潤一郎著

金色の死

〔新刊〕

本書は花袋氏最近の傑作中より、小説十篇を選び、その評論あり、感想あり、紀行文あり、小説あり、趣味津津あり、紀行佳なり、小説あり、氏の藝術は正しく、處佳ならず、真に文學愛好者の必讀に充満す。眞に文學愛好者の必讀に充満す。眞に文學愛好者の必讀に充満す。

菊半裁型總布特製美本
紙數二百五十餘頁
各册金五十錢 □ 送料金六錢

『金色の死』創造『獨探』の三篇を
收む。今や爛熟の極致に達せる谷
崎氏の藝術は悪魔の園に咲く花の
如く美しく、魔法使の杖の如く不
思議である。我邦の文壇に獨特の
地を開拓せる氏は最近の傾向を
らんと欲する人は本書を讀め。

21
441

終

